

# 刀剣の歴史と思想

## 第19回

酒井 利信

### 新当流にみる霊剣の技術

剣術流派の中で、刀剣の思想を最も顕著に窺うことができるのは、塚原卜伝を中興の祖とする新当流と、その流れを汲む系統である。近世剣術界全体を大きく見渡して、このことに間違いはないと思う。

鹿島神宮を中心にした流派が発生、展開してきたこともあり、非常に神道色が強く、その思想形成に神話のイメージが強くかかわっている。今回は新当流剣術の世界を垣間見ることにする。

#### ▼武の聖地 鹿島

日本の剣術を語る際、飯篠長威斎の天真正伝香取神道流を剣術流派の三大源流の一つとし、そこから新当流へと流れていく系統を、三大系統の一つとするのが通常であるが、正確にはそう簡単な流れではなく、もう少し複雑になっている。神道流は、フツヌシを祭神とする香取神宮の信仰とかかわりながら発展してきた流派であるが、これとは別に鹿島には鹿島神宮を中心とし

#### 鹿島

た特有の剣の文化があった。この地は剣豪塚原卜伝を生んだ地であり、ここで剣術において特筆すべき刀剣思想が展開している。そもそも鹿島とは、初代天皇と伝えられる神武天皇（カムヤママトイハレビコ）が、東征の際に自らの窮地を救ってくれたタケミカヅチという神を、即位の後に、感謝の気持ちから祀った地である。タケミカヅチは、国譲り神話や神武東征神話（一）に語られるように、**劔**（つるぎ）をもつて偉業を成し遂げてきた。この**劔**は、この神の所



鹿島の太刀  
鹿島上古流  
鹿島中古流  
新当流

## 刀剣の歴史と思想

### 新当流にみる靈剣の技術

#### 鹿島の太刀



鹿島神宮拝殿

有する靈剣、あるいはこの神の分身とされ、それゆえにタケミカヅチは剣の神あるいは武の神とされている。これを祀った鹿島神宮は、歴史の中で必然的に武の聖地へとなっていた。

仁徳天皇の頃、国摩真人という人が、タケミカヅチの齣靈剣の神術を後世に伝えようと、鹿島神宮の境内に祭壇を築いて日夜祈禱し、神妙剣という極意を悟ったと伝

#### 新当流

えられている。これが鹿島の剣の始まりである。国摩真人の技術は、鹿島神宮の神官たちを中心に伝えられ、当初これを鹿島の太刀といったが、後に鹿島上古流、鹿島中古流と言いかえられてきた。

#### ト伝

#### 吉川家

この鹿島の剣の系統は、吉川という家が宗家として継承してきた。吉川家は、代々鹿島神宮の神官で、卜占を職務とする家柄であり、本姓を卜部といった。ト伝はこの吉川家の次男として生まれる。幼名は朝孝といった。後に実家の本姓である卜部の一字をとってト伝と称した。当然のように実の父である覚賢から鹿島中古流を仕込まれた。その後、次男であったため塚原土佐守安幹のもとへ養子にいき、新右衛門高幹と名を改める。養父は神道流の遣い手であり、ト伝は今度は神道流を仕込まれることになる。つまりト伝は実父から鹿島の剣を、養父から神道流を習い、この伝統的な二つの流儀を融合させるような形で才能を開花させ、剣術史の中でひととき異彩を放つこととなる。

ト伝以後の鹿島の剣の系統を新当流という。

新当流における刀剣思想を窺い知ることができる文献としては、吉川家にいくつものものが残されているが、特に注目しておきたいのが『兵法自観照』以下『自観照』という史料である。これは天保十三年（一八四二）に大月関平という人が、新当流の真髓を相当のボリュームをもって書き記したものである。大月関平は文化九年（一一二）に、当時の家元であった吉川常応から「唯授一人」の称号を受けた人物である。彼は常応から、新当流の初歩から奥義にいたるまで詳しく書き記して道場へ納めるよう命じられた。再三辞退したものの、強く乞われて記したものが『自観照』である。この史料により、通常は徹底した秘密主義から知りえることのない当流派の真髓を、窺い知ることができる。その意味で非常に貴重な史料である。

#### 塚原ト伝の参籠修行と一の太刀

鹿島という特殊な地が生んだ異才、塚原ト伝は、他に類を見ないほど剣の技術に優

『兵法自観照』





## ト伝の武勇伝

れていたと伝えられる。

十七歳にして京の清水寺で真剣の勝負に勝って以来、真剣をつかつての試合が十九度、戦場を踏むこと三十七度、一度も不覚をとったことはなく、木刀をつかつての試合など数百度に及ぶといえども、切り傷、突き傷など一カ所も負うことなく、矢による傷を六カ所つけた以外には一度も敵の使う武器に当たったことはない。およそ討ちとつた敵は二百十二人ともいわれる。五百年來無双の英雄である。

というのは、『ト伝百首』に

描かれたこの剣豪の武勇伝である。

相当に強かったということである。

## 一の太刀

ト伝の伝説化されている技術に、一の太刀という極意がある。これはいわゆる参籠

修行により悟ったものであると伝えられている。参籠修行とは、鹿島神宮のご神域を出ることなく、籠りきつて祭神であるタケミカヅチに祈りつつ剣の修行をするという



塚原ト伝肖像像画（個人蔵）

苦行である。この辺りの事情については、吉川常香が文政十二年（一八二九）に著した『鹿嶋新当流正統略伝』（吉川家文書）に記されている。

ト伝父兄ノ業ヲ受テ、幼弱ヨリ剣術達者ナリシガ、猶妙処ヲ得ザル事ヲ憂テ鹿嶋大神ニ一千日ノ間参籠セシニ、神感ア

リテ霊夢ノ告ヲ蒙リ、元祖国摩真人ヨリ嫡々相伝アリトイヘドモ其極意ヲバ悟リガタカリシ一之太刀ノ妙理ヲ極メテ、当時無双ノ高手トナレリ、

ト伝は、父兄の業、つまり鹿島の剣の道統を引き継いで幼いころから剣術が達者であったが、なお本当のところを修得してい



## <塚原ト伝の廻国修行>



ないことを憂いて、鹿島神宮に一千日もの間参籠し、その結果、霊夢のお告げによって一の太刀を悟り、当時としては肩を並べるものがないほどの達人となった。以上のような内容である。

「元祖国摩真人ヨリ嫡々相伝アリトイヘドモ其極意ヲバ悟リガタカリシ一之太刀ノ妙理ヲ極メテ」(元祖である国摩真人より正統の血脈により伝えられてきたが、その極意が悟り得なかった一の太刀の妙理を極めて)という部分の解釈には慎重を要するが<sup>(3)</sup>、いずれにせよ鹿島の剣を集成して極意を悟り、それを後世、一の太刀と言っているようである。この技術が並はずれて凄いものであったことは容易に想像できよう。しかしそれだけに、これはたやすく相伝されるものではなく、信頼できる者ただ一人にしか伝えられなかった。これを新当流では「唯授一人」という。

『本朝武芸小伝』<sup>(4)</sup>には、すでに大いに

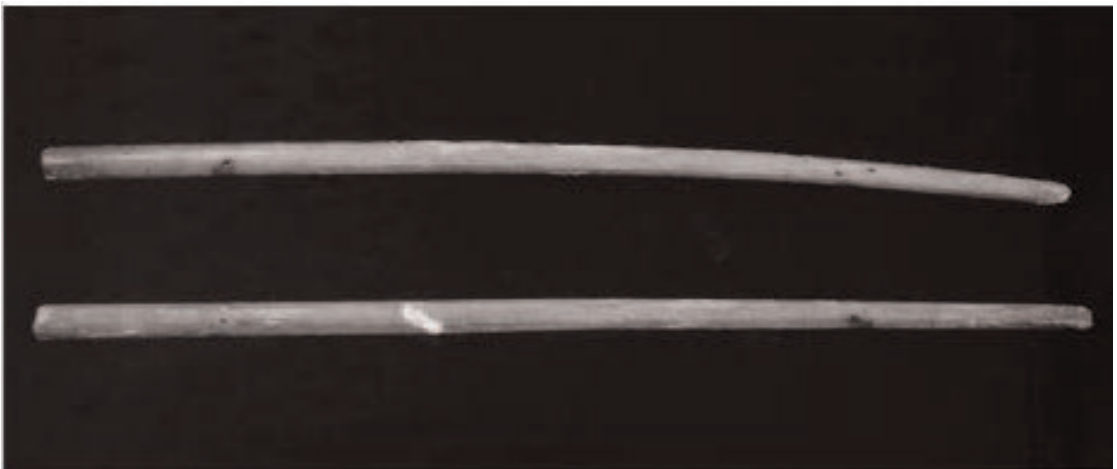
名を馳せていたト伝が、京に上り將軍足利義輝および義昭に剣や槍の技術を伝授したと記されている。これが史実であるかどうか怪しいところもあるが、それほど名声

### 廻国修行

であったことは事実であろう。『武芸小伝』は続いて、ト伝に学ぶ者は多かったがその中でも傑出していた、伊勢の国司であった北畠具教卿に一の太刀を伝えたこと、ト伝の高弟であった松岡兵庫助もト伝の妙技を会得して、後に徳川家康に一の太刀を伝授したことを記している。塚原の家系を継いだのは養子である塚原彦四郎幹秀<sup>もとひで</sup>であるが、ト伝は既に唯授一人の一の太刀を北畠具教に伝えていたことから彦四郎にこの極意を伝えることはなかったという。彦四郎はト伝の死後、北畠をいつわってこの極意を見せてもらったという逸話も残っている。この辺りの話が、史実かどうかはわからない。この後、この技がどう伝わったのかも全く不明である。

徹底した秘密主義をとっていたがために、早くに失伝してしまったというのが事実のようである。今となつてはその実態は分らない。

ト伝は人生の中で三回もの廻国修行<sup>かいこくしゆぎん</sup>を行っているが、彼の武勇伝のほとんどが、一回目の廻国修行の際の逸話であるといわれている。しかしト伝は、一回目の旅から



ト伝が使用したと伝えられる木刀（個人蔵）





帰るやいなや厳しい参籠修行に入っている。師匠的な立場、あるいはよき理解者であった松本備前守のすすめによるともいわれているが定かではない。既に相当に高い技術を持っていたト伝が、なおも求めたさらに高い次元の技術とは一体何なのか。ここに、一の太刀の実態をひも解くヒントがあるように思う。

『自観照』には、次のような記述がある。

是這<sup>このひと</sup>一<sup>いつ</sup>津<sup>つ</sup>之<sup>の</sup>生<sup>いく</sup>太<sup>た</sup>刀<sup>ち</sup>者<sup>も</sup>、一心<sup>いつしん</sup>之<sup>の</sup>表<sup>あらわ</sup>物<sup>もの</sup>也<sup>なり</sup>、  
心<sup>こころ</sup>与<sup>よ</sup>劍<sup>けん</sup>無<sup>な</sup>二<sup>に</sup>至<sup>いた</sup>一<sup>いつ</sup>也<sup>なり</sup>、——中<sup>ちゅう</sup>略<sup>りやく</sup>——理<sup>り</sup>者<sup>もの</sup>雖<sup>いえ</sup>モ  
説<sup>と</sup>理<sup>り</sup>其<sup>その</sup>実<sup>じつ</sup>唯<sup>ただ</sup>在<sup>あ</sup>心<sup>こころ</sup>、氣<sup>き</sup>者<sup>もの</sup>雖<sup>いえ</sup>モ説<sup>と</sup>氣<sup>き</sup>畢<sup>はつ</sup>竟<sup>けい</sup>謂<sup>い</sup>レ  
心<sup>こころ</sup>——中<sup>ちゅう</sup>略<sup>りやく</sup>——故<sup>ゆ</sup>当<sup>たう</sup>流<sup>りゅう</sup>劍<sup>けん</sup>術<sup>じゆつ</sup>者<sup>もの</sup>、心<sup>こころ</sup>術<sup>じゆつ</sup>之<sup>の</sup>至<sup>いた</sup>  
誠<sup>まこと</sup>極<sup>ごく</sup>不<sup>ふ</sup>可<sup>か</sup>不<sup>ふ</sup>尽<sup>けん</sup>、

一の太刀は、心が表れたものであり、剣と心が二つになることはない。理は理を説くといえどもその実はただ心にあり、気は気を説くといえども畢竟は心を言う。故に当流の剣術は心術を尽くすべきものである、といった内容である。つまり一の太刀とは、心の技術、心法を含んだ技術であると言えそうである。

『ト伝百首』が語るように、廻国修行で人を斬り尽くしてきたト伝が突き当たった壁は、心の問題であったのではないだろうか。斬ってきた人の数だけ遺恨をかい、いつ自分が逆に殺されるかという恐怖心、等々、様々な激しい心の乱れが生じていたはずである。これが太刀筋を狂わせる。それを乗り越えるための参籠修行であり、その結果、得られた極意が一の太刀であった。

一の太刀が剣を振る技術を伴わない心法であるとは考えられないが、単なる操剣の



塚原ト伝の墓（茨城県鹿嶋市須賀）

技術ではなく高度な心法を含んだものであったと考えて良いだろう。

更に『自観照』は、この一の太刀が神代の師霊剣の正脈を継ぐものであるということとを述べる（註）。この極意の要諦である心法に、師霊剣のイメージが大きく関与していたことは十分に考えられる。

## ▼ 呪剣の技術

ト伝の技術を伝える新当流には、一の太刀の他にも非常にユニークな技術があることが『自観照』に記されている。

霊<sup>みたま</sup>剣<sup>のたま</sup>呪<sup>のたま</sup>振<sup>のたま</sup>の太<sup>た</sup>刀<sup>ち</sup>という技術がある。

名称からしておどろおどろしいが、端的に言えば剣による呪術である。

この技術も一旦、途絶えている。

『自観照』には、その動作についての記述がある。実際の細かな動きについては知るよしもないが、記述にそって理解すると、太刀を両手にとり、真直ぐに立ち、両足をそろえて剣を構える。頭上には天神<sup>あまつかみ</sup>を足もとには祇神<sup>きん</sup>を意識して、太刀の柄をに



## 刀剣の歴史と思想

### 新当流にみる霊剣の技術

ぎる。氣海丹田を意識しながら左手を太刀の半ばにつけ、砂摺りして左足を前にだし、祓いの太刀のごとく左右左右左右と進退しながら剣を振る、といったものであろうか。この技術の説明として、以下のような一節がある。

呪振の刀と申事は、伊弉諾尊、伊弉冉尊の黄泉国へ降賜時、進行玉ふ時、八ツの雷向へ来時、帶る剣を抜て呪振賜八雷恐て小るや、是呪剣を振起源也、云々、

これは黄泉国神話の引用である。イザナ

ギが、死んだイザナミを追って黄泉国へ行く。そこで穢れを意味する邪神としての雷神を、剣をもって呪術で追い払った神話である。これが呪剣を振る技術の起源であるという。

確かにこの霊剣呪振の太刀という技が、呪術であることがわかる。現代科学に慣らされた我々には理解しにくいが、「ここに居て彼を制する、刃を血塗らずして」なされる技術が間違いなくあったのである。

そもそもト伝は、神宮の卜部職の家柄に生れており、いふなればシャーマンの血を引いている。彼の技術が呪術的であったことは、大いに理解できる。

シャーマンとしてのト伝

更にこの技術は、外敵のみならず、祓いのように、我が身の穢れといった内面的なもので処理しようとする呪術であったようである。

そして刀剣の思想として重要なことは、この技が、『自観照』に「夫霊剣呪振の太刀と申は、即武甕槌太神の師霊剣御事を奉申也」(霊剣呪振の太刀とは、すなわちタケミカヅチの師霊剣のことをいうのである)と記されているように、一の太刀同様、意識的にはタケミカヅチの師霊剣を使う技術であるということである。

神の力をかりた呪剣の技術があつたということである。

内面への方向性

師霊剣の技術





# 刀剣の歴史と思想

## 新当流にみる霊剣の技術

### 平国の剣と鹿島に伝わる 国譲り神話

新当流においては、彼らが使う太刀と劔  
霊剣を同一視してみるような思想が殊更に  
強いが、この霊剣の神聖性の根拠は、やは  
り国譲り神話や神武東征神話に求められて  
いる。これが神々との関係を確かなものに  
するからである。

このうち国譲り神話について、鹿島の地  
に特有の展開が認められる。

この神話については、これまでにいく度  
となく取り上げてきているが、要点のみ再  
度確認すると、タケミカヅチは葦原中国  
の統治権を譲るように交渉しに下界に降り  
るが、この際、劔（劔霊劔）を上に向けて  
柄を波打ち際に突き刺し、切先の上に座つ  
て大国主（おおくにぬし）に国譲りを迫った、というもので  
ある。

新当流では、この神話に関して独自の解  
釈をしている。以下、『自観照』の記述で  
ある。

如書紀一、倒ニ植於地一 踞ニ其

### 鹿島独自の国譲り神話

鋒端一、神変を現賜ふに非ず、倒とは柄  
を握りて鋒端を地に衝立て、劔を後にし  
て身を前に進んで踞賜を云、

日本書紀の記すように、劔を地に逆さま  
に突き立てて、その切先に座り、神変を現  
したのではない。柄を握り切先を地に突き  
立てて、劔を後ろにして、その前に座った  
のである、といった内容である。

本来の国譲り神話からはかなりの変形が  
みられる。

そもそもこの霊劔は国を平らげる治国の  
象徴として捉えられ、平国の劔とされるも  
のであるが、その方法は、本来の日本書紀  
の伝承でも、この劔をもつて大国主を斬つ  
たりはせず平和的に国譲りを完結させたこ  
ろに特徴がある。これが鹿島の伝承では、  
更に切先を下にして突き刺し、その劔の前  
に座るといふ。つまり全く武力に頼らず、  
できれば平和的に事を成し遂げようという  
姿勢を強調している。これは流派の理念と  
でもいうべきものの表れであろう。

ト伝の生家である吉川家は、鹿島神宮の  
卜部職であると同時に鹿島城の家老職でも

あり、家柄としては為政者である。ここに  
みた鹿島に特有の神話解釈には、為政者と  
しての平国の劔の思想が強く反映されてい  
ると考えてよいだろう。

### 〈註〉

- (1) 本連載、第9回目参照。
- (2) 鹿島神宮では、毎年正月に龜卜によ  
つてその歳の吉凶を占い、これを全国に  
鹿島の事触れとして伝えていたが、吉川  
家はこの卜占を職務としていた。
- (3) 一の太刀については、先学において、  
この道統のどの段階で創始されたのかと  
いうことが問題とされてきた。国摩真人  
創始説、松本備前守創始説、塚原卜伝創  
始説の三通りの説がある。
- (4) 正徳四年（一七一四）、日夏繁高（天  
道流）の著作。
- (5) 「二津之生太刀者——中略——神代附  
属之霊劔之正脈而」『兵法自観照』（吉川  
家文書）。

平国（ことむけ）の劔

